

徳島果研ニュース

2009年8月(通巻No. 105)

徳島県立農林水産総合技術支援センター 果樹研究所

<http://www.green.pref.tokushima.jp/kaju/>



研究情報

ナシ産地維持のための早期成園化技術の開発

落葉栽培担当 佐尾山 祥史

1. はじめに

本県のナシの約半分を占める「幸水」は、老木化による樹勢の低下や収量の減少、萎縮病の発生などの問題を抱えており、改植が必要となっている。しかし、改植に際しては5年程度の未収穫期間があることから、改植が進まない要因の一つとなっている。このため、計画的な改植を促し産地の維持発展を図るため、植え付けから収穫までの期間を大幅に短縮する技術を開発したので報告する。

2. 方法

(1) 育苗：幸水の1年生苗木を所内育苗圃場に60cm間隔で植え付け、新梢3本を伸長させた。1年目の冬に基部の外芽で切り返し、更に1年間育苗

して新梢を伸長させた(表紙写真左)。

(2) 移植：育苗した大苗を本圃へ移植した。植え付け間隔は永久樹が5m×5m(10a当たり40本)、計画密植樹は永久樹の間に2本ずつの1.6m×5m(10a当たり80本)とし、合計10a当たり120本植え付けた。整枝法は2本主枝とし(表紙写真右)、移植2年目に永久樹は樹形の養成のため結実させなかった。移植3年目には永久樹にも結実させた。

3. 結果の概要

(1) 本育苗方法により2年間育苗することにより樹高3mの大苗を育成することができた。なお、育苗圃10aで約700本の育苗が可能である。

(2) 移植2年目には、10a当たり314kgの収量を得

た(表1)。移植3年目には、10a当たり合計1,358 kgの収量を得た(表2)。

以上のことから、本方法により移植3年目で成木園(3.5t/10a)の約4割の収量を得ることができ、1年生苗木を直接本圃に植え付ける従来の方法で

は、この収量に達するには6～7年要することから、従来の方法に比べて改植時の未収穫期間を大幅に短縮することが可能となった。

表1 着果数および収量(大苗移植2年目、平成19年)

処理区	植付 本数 (10a)	1樹当たり			10a換算	
		着果数	収量	1果重	着果数	収量
		個	kg	g	個	kg
永 久 樹	40本	—	—	—	—	—
計画密植樹	80本	12.6	3.9	311	1,008	314
合 計	120本				1,008	314

表2 着果数および収量(大苗移植3年目、平成20年)

処理区	植付 本数 (10a)	1樹当たり			10a換算	
		着果数	収量	1果重	着果数	収量
		個	kg	g	個	kg
永 久 樹	40本	15.7	4.7	306	616	188
計画密植樹	80本	53.1	14.6	275	4,250	1,170
合 計	120本	—	—	—	4,866	1,358

高糖系温州の隔年交互結実マルチ栽培による高品質安定生産

常緑栽培育種担当 山本 浩史

1. はじめに

温州ミカンのマルチ栽培は高品質果実生産技術として全国的に普及し、本県では十万など高糖系温州で実用化されている。しかし、高糖系温州を用いてマルチ栽培を行うと隔年結果がさらに助長されるため、園地別交互着果によってマルチ栽培が行われている。

そのため、隔年交互結実マルチ栽培の栽培技術施肥体系

N施用量	2下～3上	3下～4上	5下	6下	8下	11上	合計
結実樹Ⅰ	5kg	5kg	6kg	12kg			28kg/10a
結実樹Ⅱ	5kg	5kg		12kg			22kg/10a
遊休樹Ⅰ	5kg	5kg		4kg	6kg	12kg	32kg/10a
遊休樹Ⅱ	5kg	5kg		12kg	6kg	12kg	40kg/10a

2008年(H20)の遊休樹は、遊休樹Ⅰのみの施肥体系とした。

3. 結果の概要

2割せん定区では、収量が少ないが一果平均重

術の確立が課題となっている。

2. 試験方法

隔年交互結実マルチ栽培を実施している大津4号(7月下旬被覆)を用い、以下のせん定および施肥試験を行った。結実樹のせん定は、無せん定および間引きせん定を主体としたせん定量2割の処理を行った。

は大きくなった。逆に、無せん定区では、収量は多くなったが一果平均重は小さくなった(表

1)

また、階級比率は2割せん定区で2006年はL級果が主体となり、2008年はM級果が主体とな

った(図1)。また、収量は夏肥施用により多くなった(表2)。

表1. マルチ栽培樹のせん定が収量に及ぼす影響

処理区	2006年(H18)			2008年(H20)		
	収 量	果 数	一果重	収 量	果 数	一果重
	kg	果	g	kg	果	g
2割せん定	32.0	286	112	67.3	718	94
無せん定	42.7	402	106	88.7	1041	85

表2. マルチ栽培での夏肥施用が収量に及ぼす影響

処理区	2006年(H18)			2008年(H20)		
	収 量	果 数	一果重	収 量	果 数	一果重
	kg	果	g	kg	果	g
結実樹Ⅰ(夏肥施用)	40.2	358	112	78.6	886	89
結実樹Ⅱ(夏肥無施用)	37.1	374	99	72.4	790	92

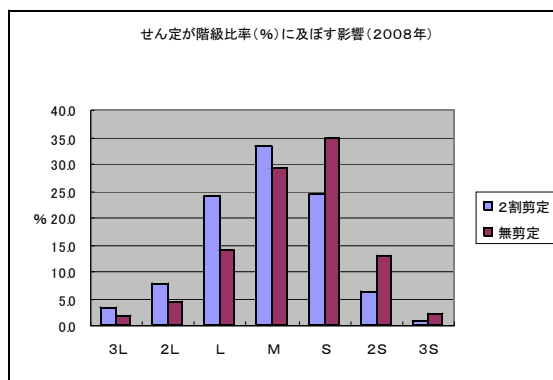
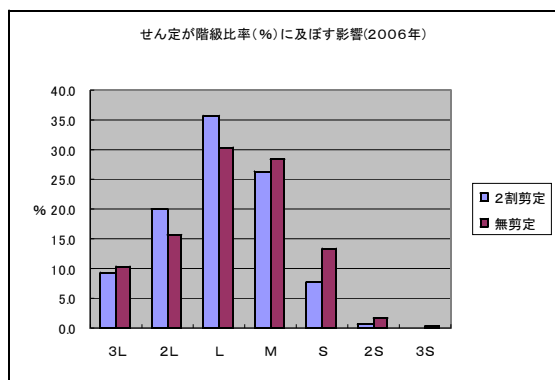


図1. マルチ栽培でのせん定が階級比率に及ぼす効果(左:2006年、右:2008年)

行 事

☆ 全国ナシ研究大会における研究所案内 ☆

6月30日～7月1日、本県で開催された第58回全国ナシ研究大会において果樹研究所県北分場を視察して頂きました。全国各地から約200名のナシ生産者および関係者の方々に来所頂き、天候にも恵まれ盛況でした。

主な紹介は、①ナシの早期成園化技術、②ナシの溶液受粉技術、③ナシの萎縮病調査、④超音波利用による果実吸蛾類の被害防止技術、以上4つの研究課題について案内いたしました。



ナシの早期成園化技術の紹介



ナシの溶液受粉技術の紹介



超音波利用による果実吸蛾類の被害防止技術の紹介

お知らせ

☆平成21年度果樹研究所体制☆

	(勤務地)
所 長	山尾正実 (勝浦)
次 長	森 聡 (勝浦)
次 長	田邊 弘 (上板)
・総務担当	
主査兼係長	小川浩史 (勝浦)
・常緑栽培育種担当	
専門研究員兼科長	山本浩史 (勝浦)
主任研究員	津村哲宏 (勝浦)
主任研究員	安宅秀樹 (勝浦)
技師 (技能)	岩浅照松 (勝浦)
技師 (技能)	久積幹夫 (勝浦)
・落葉栽培担当	
専門研究員兼科長	佐尾山祥史 (上板)
主任研究員	福田雅仁 (上板)

研究員	岡島さつき (上板)
技師 (技能)	以西一史 (上板)
・生産環境担当	
専門研究員兼科長	谷 博 (勝浦)
専門研究員兼科長	中西友章 (勝浦)
主任研究員	新居美香 (勝浦)
研究員	兼田武典 (勝浦)

○人事異動○

4月1日付
 転 入
 森 聡 次長 (とくしまブランド戦略課から)
 転 出
 柴田好文 (農業大学校へ)
 小池 明 (とくしまブランド戦略課へ)

果樹研究所ニュース No. 105

平成21年8月発行

編集発行 徳島県立農林水産総合技術支援センター 果樹研究所

〒771-4301 徳島県勝浦郡勝浦町沼江

TEL : (0885) 42-2545 FAX : (0885) 42-2574

(県北分場) 〒771-1320 徳島県板野郡上板町神宅

TEL : (088) 694-2712 FAX : (088) 694-2526

<http://www.green.pref.tokushima.jp/kaju/>

印 刷 徳島印刷センター

表紙の写真

ナシの早期成園化技術の開発

左 : 移植前大苗(1月)

右 : 移植後大苗(4月)